

12/13 ルカの福音書 2 章 1-7 節 「神としてのあり方を捨てて」

小池 宏明 牧師

御使いは、マリアに聖霊によって身ごもった子が、大いなる者、神の子、ダビデの王位を受け継ぐ者、永遠なるお方、罪からの救い主と言われると告げていた。「このお方は、どれほど、美しい、立派な王宮にお生まれになられることか！」と思いきや、「飼葉桶に寝かされた」と言うのだ。このギャップに驚かされる。一体どういうことだろうか？

* 布に包まれて、飼葉桶に寝かされる主イエス様

6、7 節「ところが、彼らがそこにいる間に、マリアは月が満ちて、男子の初子を産んだ。そして、その子を布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。」

イエス様は飼葉桶に寝かされたことから家畜小屋で生まれたとされている。伝承によれば、「小屋」というよりも「洞窟」のようなところだとされている。救い主であられるお方が、このような貧しく、低い状況で生まれて来られたことは、この世界で、どんなに低く貧しい境遇に置かれた人々にとっても、まさに救いなのだ。主イエス様こそ、貧しき者、自ら謙り心の貧しい罪人の友となることができるお方。何と素晴らしい福音、良い知らせだろうか！

* 神の在り方を捨てて貧しくなられた私たちの主

パウロはピリピ人への手紙 2 章 6-8 節で次のように告白している。「キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。」

これは、当時、キリストとはどういうお方なのか、繰り返し告白されていた内容をまとめたキリスト賛歌（賛美の歌）と言われている。

神の在り方を捨てて、私たちの同じ人の姿を取って下さったがゆえに、しかも自ら低くなり、十字架の死にまでも従われたゆえに、私たち人間に生きる道、いのちの道が開かれたのだ。

主イエス様がこの世界に来て下さったことは、しかも、最も低い所に生まれて来て下さったことは、神の深い愛の現れであり、神の限りない憐れみを示している。私たちも最も低く貧しいところに立ち返り、そこでキリストと出会う喜びを見出したい。